青年海外協力隊　2023 年度 1 次隊　八幡和子

No.15

カンボジア便り

カンボジアの歴史と地雷

日本では、カンボジアについて話すと「地雷」を連想する人がたくさんいるのではないでしょうか。私も、カンボジアに来るまで、どこかで知った知識で「地雷」という言葉を想像していました。

カンボジアは、今から 50 年ほど前、内戦というものがありました。戦争と聞くと国同士の戦いを想像するかもしれませんが、カンボジアでは国民の間で考え方の違いがあり、国民同士の戦争が起こりました。

内戦の間、敵を足止めするために無数の地雷（地面に埋めて、それを踏んだ人や戦車を爆発させる爆弾）が埋められたのです。それとは別に、飛行機から投下された爆弾の不発弾もそれ以上に埋まっていると言います。人が多く住む地域は早々に除去されましたが、まだ田舎の農村部には多数残っていて、地雷や不発弾により 2022 人は 41 人の死者が出ていたそうです。学校へ通学するために歩いている子どもや、畑で作業をしている農家さんなどが被害にあっています。

ＪＭＡＳ（日本地雷処理を支援する会）さんって？？

私の住んでいるバッタンバン州は、タイへ向かう大きな道が走っているため多くの地雷が埋められた地域です。その地雷を処理するために、日本のＮＧＯ団体が活動していることを皆さんは知っていますか？日本の自衛隊でお仕事を終えた人が集まり、『自分たちの技術で何かできないか』と始めたのが「日本地雷処理を支援する会」だそうです。現在、カンボジア以外にも 3 つの国で地雷や不発弾の除去や、沈没船からの漏油集めをされています。

「マイナスから０(ゼロ)へ」

こんなに小さくて戦争から何年も経っているのに、まだ爆発する危険がある。

１つ数百円だそうです。それで命が奪われてしまいます。

その JMAS さんの地雷除去見学に行ってきました。バッタンバンの近くの町、シソポンを拠点に地雷除去へ向かいます。車で 1 時間ほど走った田んぼを見て、担当者の中野さんが「この辺は見渡す限り JMAS が地雷を除去しました。」と話してくれました。一見普通の田んぼなのです。しかし、10 年前にはここに爆弾が埋まっていたのだと思うと、気が遠くなる作業です。

地雷原、という地雷がまだ埋まっている現場で、作業の様子を見せていただきました。林の中を重い装備を付けて、炎天下の中土に埋まっている地雷を金属探知機で、少しずつ少しずつ探すのです。地雷が見つかった場所には杭が打たれているのですが、案内してもらうと大体 30 歩歩けば次の地雷の場所が見つかりました。そんなにあるとは思っていなかったので、背筋が凍りました。

人間がお互いに傷つけ合うことの怖さを感じました。

そして、何といっても命懸けの仕事です。「今年の４月は暑かったから、カンボジア人の隊員も熱中症で倒れた」と言っていました。隊員の中には女性もいました。微かな反応も見落としてはならない、体力も精神力もいる大変なお仕事です。中野さんは、「私たちがやっているのは、マイナスをゼロにする仕事です。」と言っていました。地雷があるかもしれない、というのは安全に土地が使えない分、土地を売ることも人が住むことも難しい。そのカンボジアの『マイナス』な部分を『ゼロ』の状態にする、という意味だそうです。

「０から１へ」～学校や道路～

JMAS さんは地雷除去のチームと、もう 2 つチームがあります。それが、インフラ事業支援と農業支援です。地雷除去をした土地は、カンボジアの人々の生活の土台になります。しかし、その土台が不安定だと生活は豊かになりません。道がぐちゃぐちゃで悪ければ大きなトラックは通れない。トラックが通れないと農作物の運搬が出来ない。農作物が運べなければお金が入らない。それを解決するには個人の力では無理だと皆さん分かるかと思います。その困難を受け止め、地雷の無くなった地域に道路を作ったり、学校を作ったりするお手伝いをするのも、JMAS さんのお仕事の１つだそうです。

今回は、JMAS さんが日本の企業と協力して建てた小学校にお邪魔してきました。この学校ももともとは地雷原でした。その地域には子供たちが通えるような小学校が無い、という声で建設したものだそうです。写真の通りとても綺麗な学校です。以前、子どもたちが学校として集まっていた建物が隣に残っていましたが、トタンで屋根と壁はできていて、地面は土で雨季には足が水に浸かっていたそうです。子どもたちは、違う学年も同じ教室に一緒になって、一生懸命勉強していました。

「０から１へ」～農家さんを支援する～

もう１つのグループは、農家さんの支援事業です。地雷の無くなった広大な土地を田んぼや畑にする、と言うだけは簡単ですが、実際はとても大変。地雷を処理した土地に住む農家の方々は、農業に関する知識や技術が乏しく、勾配(地面の高さや低さ)のある田んぼでイネの栽培をされるなど、適切な栽培方法からは程遠く、安定した収入を得られていませんでした。正しい稲作の知識を教えること、そして農業機器を使って整地の手伝いをすることなど、これらも現地の人たちに協力を求められて、農業の支援をしているそうです。

見せていただいた田んぼは、とても整っていてまさに新潟で見るような田んぼでした。収入も、以前の 2 倍以上になっているそうです。田んぼをしている農家さんにお会いしたのですが、JMAS さんの支援に感銘を受けたのか、永らく恵まれなかった子どもがやっと生まれた時、その子の名前を「サクラ」にしたのだそうです。その話を聞き、JMAS さんと同じ『日本人』として、とれも嬉しく誇らしい気持ちになりました。そして、JMAS さんのお仕事の素晴らしさを感じました。